

## 早稲田大学 法学部 世界史 講評

### 〔総合分析〕

|        |   |
|--------|---|
| 出題形式   | マーク・記述併用  |
| 試験時間   | 60分   |
| 特徴・その他 | 選択問題 34 題に論述 1 題という構成は昨年と同じ。論述のテーマは 4 年ぶりに欧米から出題された。正誤判定・論述ともに昨年・一昨年に比べてやや難化した。 |

### 〔大問別講評〕

| 番号 | 出題内容       | コメント   | 難易度 |
|----|------------|--|-----|
|    | 中国の戸籍・土地制度 | テーマとしては一般的だが、正誤のポイントが見極めにくく、細心の注意が必要。設問 2 の 4 で、「青海・チベット」を服属させたのは雍正帝。設問 6 の 3 は、「抗糧」ではなく「抗租」が正しい。設問 7 の 2 は、天朝田畝制度は実施に至らなかったが正しい。設問 8 の 3 の国民党一全大会開催地は広州が正しい。内容は国際教養学部の地図問題として出していた。 | 難   |
|    | イスラーム      | 正誤判定と語句選択のミックス。語句選択は易しい。設問 のコルドバ関連は難しい。設問 の十字軍は 1 回ではなく 3 回が正しいが、もうひとつアイユーブ朝建国はファーティマ朝滅亡の前の出来事。設問 8 の は、セルジューク朝ではなく、モロッコのマリーン朝。  | 標準  |
|    | ヨーロッパ中世    | 文章の内容が微妙で、正誤の判定に惑わされやすい。設問 3 のカール 1 世のイベリア遠征は、失敗に終わったが、もともとそこを支配していたわけではないので、「放棄」は誤り。設問 5 は問題文が読みづらい。アリストテレス受容前の学者とは、単に「この中で時代的に早い人の組み合わせは」と置き換えれば簡単。                                | 難   |
|    | 欧州統合の展開    | テーマ設定は欧州統合だが、下線部についての設問は全体としてヨーロッパ近現代の雑題といった雰囲気。2004 年の加盟国は政経では基本事項だが、世界史では意外な盲点。  | 標準  |
|    | 米の世界恐慌対策   | 米の恐慌対策は、ニューディールのみなら易しいが、フーヴァー政権の、それも国内政策となるとかなり書きづらい。フーヴァーとローズヴェルトの政策の本質的違いは、経済活動に対する国家の介入・統制の有無・是非であるが、その結論に至る前提としてフーヴァーの具体策を最低でも 1 つはあげなくてはならない。                                   | やや難 |

### 〔総合コメント〕

全体として、正誤判定のポイントが明瞭でない。難しいというよりははっきりしないのである。はっきり言って、あまり後味の悪い問題ではない。正確な知識をたくさんもっていればそれなりの点が取れてしかるべきだが、さらに、少したちの悪い正誤問題に慣れておくことが求められる。やはり問題演習の量が命運を分けることになったのではないか。 の欧州統合で、2004年1月の加盟国が出題された。2004年1月といえば、高卒1年目の受験生が中3のときの出来事。高1のとき世界史の教科書や用語集を入手していれば、当然取り扱い範囲外である。来年もこうした直近の事項が出る可能性は高い。教科書・用語集の域を超えて、受験前年の秋までの国際的事件はしっかりおさえておきたい。 の「米の世界恐慌対策」はフーヴァーの国内政策をあげられるかどうかで配点に差があるはず。ただ単に、自由放任政策というだけでは、解答文の大半をニューディールが占めることになり、「ニューディール政策とは何か」という設問でもよいことになる。その辺も配慮して論をまとめたい。去年から、米のサブプライム＝ローン破綻が引き金となった世界同時株安が問題となっており、「恐慌対策」は時事問題的テーマでもある。